

『愛知大学通信』掲載教職員座談会 「私の追憶 愛知大学の回顧と展望」

東亜同文書院大学記念センター研究員 佃 隆一郎

ここに翻刻、掲載する資料は、1981年11月25日付の『愛知大学通信』第30号に収録された「私の追憶」シリーズ「愛知大学の回顧と展望」である。

初期の『愛知大学通信』(1973年創刊。現在は冊子体であるが当初は新聞体裁)には連載の随筆として、愛知大創設以来の本間喜一第2・4代学長をはじめとする教職員の(東亜同文書院大学時代を含めた)回想が掲載されていた。本資料は「私の追憶」というタイトルでは第12回目にあたり、大石岩雄法経学部教授(学部名・肩書は当時。以下同)と小幡清金同学部教授の証言が収録されているが、実際はほかの教職員・卒業生を含めた計6名での座談会であり、また当日(81年10月31日)には講演会も行われ(注1)、両会での両教授の講演や発言をピックアップして編集したものであることが、資料末尾の断り書きから看取できる。

『愛知大学通信』での一連の“追憶シリーズ”は、20世紀末に『愛知大学五十年史』編纂事業の一環として逐次刊行された『愛知大学史紀要』に大部分が再録されたが(注2)、この回は未収録であった。しかし編集されたものであるとはいえ、この「愛知大学の回顧と展望」には(東亜同文書院大学関連の事柄はないが)創設期の興味深いエピソードや、そこからこの時点までの愛知大学の歩み、さらには両教授それぞれから愛大の「今後の」展望が述べられていることから、ここに全文を掲載するとともに、その上で注釈を施す形で、解題を試みてみたものである。

掲載・記述の仕方としては、随所に丸数字で

語句指定の注釈を設け、タイトルを付して文末で述べることにした。この項の資料は1985年愛知大学刊行の『愛知大学通信縮刷版 創刊号～第50号』204頁よりのものである。翻刻では、縦書きの原文を横書き化するにあたって一部漢数字を算用数字に改めた以外は、そのままの形で表記した(したがって、翻刻文中のカッコ部分は、「原文ママ」の注記を除きすべて原文での表記である)。注釈では、人名の敬称や肩書を一部省略した。

(注1) この座談会と講演会について、日にち以外の詳細は不明であるが、資料に「愛知大学同窓会豊橋支部主催」とあることから、愛大豊橋校舎内のおそらく記念会館(1978年竣工)で開かれ、講演会の講師は大石・小幡両教授(いずれも故人)が引き受けたとされる。

(注2) 各『愛知大学史紀要』に再録された諸氏の「追憶」は以下の通りである。(掲載順)
第1号(1994年刊)…本間喜一(『愛知大学通信』創刊号、2、3、4、8号所載)
第3号(1996年刊)…池上貞一(『愛知大学通信』—以下同—25、26号所載—同左—)、小幡清金(6号)、神谷龍男(7～9、11、12号)、川越淳二(15～17号)、鈴木沢郎(13号)、津之地直一(18～20号)、諸星熊蔵(11号)

《翻刻》

【写真キャプションでの肩書・経歴】

大石岩雄／(おいしい・いわお)

法経学部教授 経営学担当

昭和19年9月東京商科大学(現一橋大学)学部(原文ママ)卒業

昭和22年10月就任

小幡清金／(おばた・きよかね)

法経学部教授 財政学担当

大正12年3月東京帝国大学(現東京大学)経済学部卒業

昭和22年4月就任

【本文】

私の追憶 愛知大学の回顧と展望

〈愛知大学に就任されることになった契機、就任当時の印象などについて〉

小幡 戦後愛知大学が出来たことを知ったのは、私が奉職していた台北帝国大学が終戦で廃校となり勤務先の無くなった昭和21年の秋頃、文部省の大学学術局長を訪ねた時であった。ちょうどその室へ本間先生(本間名誉学長)が入ってこられ、局長から愛知大学が新設されることを知らされ、本間先生を紹介された。本間先生からは、大学設立のことは小岩井先生(故小岩井浄第三代学長)が熱心にやられているので一度会うようにとお話があった。11月頃であったか、大学設立仮事務所(当時東京神田西小川小学校内)で小岩井先生にお会いした。先生はその場で採用を決められたが、今は財源が無く給与をお支払いすることができないので4月までは来ないで欲しい、翌年4月になれば学部もできるということであった。① そこで昭和22年の3月頃であったが、豊橋校舎に来て一条雄司先生に初めてお会いして、校内を案内された。校内は焼跡みたく、本館前には1トン爆弾投下の

跡だという大きな播鉢状の穴が残っていた。校舎は爆撃の余波を受けて窓ガラスが無く、机も椅子もろくにそろっていない状態で施設設備はよくなかったが、学生は学問に熱心で、講義のしがいがあった。以前東京の大手私大で講義をしていたことがあったがそれとは大違いであった。当時の愛大生は勉学の途中で戦争にとられたなどの関係者が多く学問に対するあこがれがたいへん強かったようである。また、引揚者や罹災者が多く、貧乏であったが教職員も同様であった。当時私の月給は千円、小使いさんが六百円、本間先生が千二百円であったと思う。みんな月給だけでは食えなくて運動場に薯を植えたり鶏を飼ったりしていた。

大石 太田英一旧東亜同文書院大学教授から東京商大の学長に経営学担当教員採用の話があり、古川栄一教授を経て転任の希望の有無について御相談があったのは昭和22年4月早々だった。私も戦災に会い(原文ママ)、東京生活にもいや気がさしていた折柄、郷里に近い豊橋に大学があるので、一度当局者にお目にかかろうという気持になった。

早速当時の東京商大でゼミの先生だった高瀬荘太郎先生に御意見を伺ったところ「本間さんの開いた大学なら、働き甲斐があるから、一度出掛けて相談してみたらよい」とのお話で、五月はじめに、はじめて豊橋の地をふんだのだった。②

駅前にはアサリ貝の汁を売る屋台店がならび、名鉄の仮駅が戦災のあとでも生まれましく(原文ママ)三角形の壁面だけが対立して残っていた。渥美線でやっと大学を訪ねたが、旧兵舎そのまま、窓ガラスも所々板がはってある本部の建物、一橋のアカデミックな環境とのちがいに心のいたむものがあった。③

刺を通ずると本間先生は官舎(当時は愛知大学公館とはいわずに師団長官舎の官舎という言葉がのこっていた)にいてるので、女子事務員に案内されて、いささか明治調の建物に行き、やっと本間先生にお目にかかることができた。(愛知大学新聞別冊第112号参照)④

〈林学長、本間学長、小岩井学長の思い出などについて〉

小幡 林学長(故林毅陸初代学長、元枢密顧問官、元慶応義塾大学総長)は、学長には就任されていたが来学することは少く、私は一度もお目にかかったことがなく、実務は本間先生がやられていた。⑤

本間先生はよく『冗談』をいう先生であったが「大学というところは建物ではない。七堂伽藍は金さえあればいつでも出来る」と時々言われた。それを貧乏大学の負け惜しみと私は思ったこともあるが、本間先生は大学の建物はどうしてもよいと軽視されたのではなく、ムリな借金をして外観を立派にするのはよくない、金使いをルーズにするのは甚だ危険だと、先生のふるさとの上杉鷹山公の教訓が深く身に染みついていたからであろう。愛大の財政難から大学の借金が増すのを見ていた本間先生が「みんな豪い(原文ママ)よ。借金することを少しも恐れない」と皮肉な言葉で警告されたことを私は覚えている。⑥

本間先生の陰にはいつも小岩井先生の影が浮んでくる。二人はお互いに信頼し敬愛し合った稀に見る名コンビであった。嘗て何かの事柄で二人の意見が違うことがあったが、「本間先生の言われることじゃ仕方がない」と小岩井先生は自説を引込めたことがある。「赤い教授」小岩井を大学から追い出せと軍部が命じて来た時、本間先生が頑としてこれを退けたことを小岩井先生は深く感銘していた。小岩井先生が急病で亡くなった時の本間先生の落胆ぶりを私は推察したものである。⑦

「愛大事件」が起きた時、大学を数十名(数百名?)の警官が大学の敷地をとり囲んで大騒ぎをした。愛大事件を東京の諸新聞が大文字で連日の様子に書きつらねたので、新参の愛大をただで全国的に広告してくれたことになった。事情を調査しに検事や警官や新聞記者が大勢学内に入って来た時、本間先生は当時の実相を大きなビラで図解して、警察側の言い分が真実と違っていることをじゅんじゅんと説明された。軍部、警官など、権力を背景に筋の通らぬうそを言い

張ることをほんとうにきらいな(原文ママ)人柄だなどとその時私は思った。⑧

大石 本間先生は私の学生時代の一コマのうちに、深い印象を与えられている。それは昭和10年頃、在学していた東京商科大学で『白票事件』(一種の学内紛争)がありましたが、当時私は学生の代表の一人として、当時教授であった本間先生と渡り合ったことがあった。先生は実にぬりくりりと逃げられまして、今でもそうなんですが座談が実に巧妙でした。それで最終的にはおだてられたりして、結局はいいまかされたように思います。⑨

小岩井先生と初めてお会いしたのは、最初に豊橋に来たときであった。本間先生と旧官舎で思い出話を交えながら会談している折、少し寸の短かい、くたびれた着物を、ごちなく着た堂々たる体軀の人が、応接間に静かに入ってこられた。しかも手には茶渋のついた古い万古焼の湯呑を持ち、私に一杯の茶を提供してくれ、傍の椅子に音もなく座られた。本間先生はその人を一寸顧みられながら「こちらが小岩井先生です」と紹介されたので、私もあわてて名刺を出して挨拶を交わしたのであった。その後、本学に赴任して本学の良さをしみじみ感じたのは次のようなことがあってからであった。新設の愛大には専門書が全然ないので自分の金をはたいてニックリッシュ(H.Nicklisch)の原書二組を東京で買い、小岩井先生のところに行って、僕の月給では買えないので大学で買って欲しい旨申し入れた。先生は一寸にがい顔をされたが「ああいいですよ」といつて買ってもらったことがある。これは愛大の建学の精神として建物などはあとにしても、一生懸命学生が勉強し、先生が研究するのを促進することに最重点をおかれていたことの表われであると思います。⑩

〈名古屋校舎の開設について〉

小幡 私学では学生数が少ないと財源が少ないわけですが、学生は豊橋だけでは大体限度であった。やはり大都会に校舎が無ければ学生数を増やすことができない。そのための足場を

一つ持ちたい。どうしても名古屋に分校を作って(原文ママ)学生を増やし愛知大学発展の基地をもちたいと言うのが小岩井先生の意見であったが、私も同感であった。しかし当時は校地を買い校舎を建てる金などとうてい無かったので、教室(建物)を借りて名古屋分校を開設することとなった。その交渉は私があたることになり、交通の便などを考慮して結局東邦高校の二階の一部をお借りすることになった。(国鉄千種駅の近くであるが建物は現存しない。)当時の名古屋では大学に行きたくてもなかなか行けなかった人が大勢いたので分校開設とともに大勢の志願者があった。(昭和25年4月短期大学部法経科第2部設置)

その後、昭和26年に戦時中ヴァイオリン工場であり、当時中京女子短大の校舎であった土地、建物を買収して、現在の名古屋校舎の地に移った。⑩

大石 名古屋校舎ははじめは夜間部だけであった。私は小幡先生と週1回2時限(二コマ)担当しており帰宅すると10時過ぎでした。仲々(原文ママ)ハードワークでしたが、昼働き夜学ぶ学生が大勢おり勉強に非常に熱心であって疲れを感じなかったと記憶している。

今ちょうど三好問題が本学の最重要な課題であるけれども、小幡先生のお話からも分るように愛知大学は歴史的にも名古屋地区に進出して今後も発展してゆかなければならないと思います。

〈大高校地の利用計画について〉

小幡 大高の校地予定地は、高いところに登ると海が見え景色のよいところである。そこに最初は工学部も作る計画であった。海に面して工業地帯であり学生は必ず来るだろうとの見通しはあった。しかし工学部は金がかかるから先ず法経学部と運動場を置くことに決定された。その時夜間部や文学部については話は出なかったがその後、この土地は緑地公園、県道などの諸問題から校舎建設用地にはならないことが解かり、そのまま(現在運動場施設として利用)となって

いたが、結果的に、三好校地買収の一財源として役立つことになった。⑪

〈愛知大学の今後について〉

小幡 大学であるから、教育学者の言う様なこと一健康でいろいろの立派な道徳的性格を具えた人間を育てること一は勿論のこととして、特に学問にすぐれた先生や学問に熱心な学生が多く集まる学園となることが何より望ましい。

土地、建物、設備、図書等の外的条件が、広々として美しく、豊富なもの望ましいが、そのために上杉鷹山公の教訓に背き、空しい夢にふけることは望ましくないだろう。

大石 今学校で問題になっていることは三好問題であるが、大学をよくするためにみんなが力をあわせて行かなければならない。最大の問題は皆が協力して三好問題を早期に解決することではないかと思う。⑫ 私は30年以上お世話になった大学ですから本学を良くすることが私共の生活をよくすることであるという気持をもっている。みんながこのような考えに立てばよりよい愛知大学が出来るのではないかと思います。

この稿は昭和56年10月31日愛知大学同窓会豊橋支部主催でおこなわれた講演会および座談会記録の一部を掲載しました。

なお、紙面の都合もあり次の方々の発言内容は省略いたしました。あしからず御了承下さい。

大見 純夫氏

昭和23年3月法経学部経済科卒業(旧制)

河合 優氏

昭和25年3月法経学部経済科卒業(旧制)

岩井 透氏

昭和26年3月法経学部経済科卒業(旧制)

河合 秀敏氏

昭和32年3月法経学部経済学科卒業

《注釈》

- ① 小幡氏が愛知大学に着任した経緯 ここからは、小幡清金氏の愛知大学着任の契機が、本間喜一氏と偶然出会ったことであったことがうかがえる。愛大開設時、小幡は唯一の元台北帝国大学教員となっていたが、その後、創立二周年にあたる1948年11月までに3名が加わり、小さいながらも一つのグループをなすにいった。本間は霞が関にあった台北帝大連絡事務所を訪ね、そこで引揚げ教員の連絡先を示した紙片を発見し、それを写し取ることで有効利用ができたといわれていて、小幡招聘を契機に本間は、当初から構想していた「東亜同文書院大学以外の海外大学教員の受入れ」を具体化させていったのであろう。

(佃稿「台北帝国大学から愛知大学へ」一馬場毅・許雪姬・謝国興・黄英哲編『近代台湾の経済社会の変遷』、東方書店、2013年、所収一参照)

- ② 大石氏が愛知大学に着任した経緯 愛知大学の実質的な創設者である本間喜一氏は、愛大の前身といえる東亜同文書院大学の最後の学長でもあり、また同文書院(1939年より大学)着任以前は、大石氏が在学していた東京商科大学の教授を務めていた。(本文および注釈で後述の)1935年の「白票事件」により、翌年本間は東京商大を辞任していたが、それから10年後の段階でも商大内では本間喜一の“存在感”が確かにあったことがうかがえる。なお、本文中にある各氏のうち、太田英一氏は東京商大を本間辞任と同時期に卒業したのち同文書院教員となったのであり、高瀬荘太郎学長はその事件で本間と行動をともにした人物である。

- ③ 敗戦直後の豊橋および、開校前後の愛大の状況(両氏の証言) 降伏直前の1945年6月20日の空襲により、豊橋市も市街地がほぼ焦土と化していたが、南郊外の陸軍施設は大きな被害がなく残り(理由は諸説あるが不明)、そこに愛知大学や時習館高校(旧豊橋中学)など各学校が入ったことで、周囲は「軍隊の街」から「学園の街」へと面目を一新した。大石氏の証言にある「名鉄の仮駅」は、戦争中国有化された豊川鉄

道の、先の空襲で駅舎を焼失した吉田駅(国鉄豊橋駅に隣接)のことであり、同鉄道と名古屋鉄道(旧愛知電気鉄道)は建設時より線路・施設を共用(現在もJR飯田線と名鉄が同様)していたことから誤りではなく、焼け残っていた「三角形の壁面」は、当時の中学生によるスケッチ(竹生節男氏画)や、豊橋の路面電車の今昔を描いた絵画(伊奈彦定氏画)にも描かれている。

両氏が口を揃えて語っている、大学内の「窓ガラスが無く、机も椅子もろくにそろっていない状態」「旧兵舎そのままで、窓ガラスも所々板がはつてある本部」といった描写は、愛大の公式通史類にも「当時の校地・校舎は、茫然と立ちつくさねばならないほど荒蕪していた」(『愛知大学五十年史 通史編』、同史編纂委員会、2000年、33頁)など各所で述べられていて、あながち誇張ではないようである。ただし、小幡氏の証言にある“爆弾投下による穴”は、事実存在してはいるのにち雨水がたまり池になったが、爆弾が1トンのものとしたら周囲の建物が全壊するほどの威力があったことから、実際は通常の250キログラムか500キロ(いずれもポンドを換算したものであるため正確には概数)であったと思われる。

- ④ 「愛知大学新聞別冊第112号」 現在も豊橋校舎新聞会によって不定期ながら発行されている『愛知大学新聞』は、1948年の創刊以来『愛知大学通信』ができるまで大学当局の広報紙としての性格も有していた。この「別冊第112号」であるが、現在1959年12月18日付の112号が「特別号」として記念センター資料室に所蔵されている(手書きガリ版刷りのコピー)ものの、内容(安保闘争関連)は資料文の記述とは無関係と思われることから、号数の誤りではなかろうか。(ちなみに、当時何度か同新聞は冊子体裁の「特集号」を刊行していた)

- ⑤ 林毅陸初代学長の事情 小幡氏のこの証言のみでは、林初代学長について誤解が生じかねないと思われるので補足すると、本間・小岩井氏らの懇請に応じて愛知大学長を引き受けた時には林氏はすでに70歳を過ぎていて、例えば新大学の場所決定を受けて東京在住の林が正式書類を持って豊橋を訪れることになっていた

1946年7月4日には、体調を崩して来られなかったとのことである。愛知大学は当初より学長が理事長を必然的に兼ねる形がとられ、林は愛大の初代理事長にも就任したことになるが、年齢・健康面や東京との行き来により、愛大での職務にはなかなか専念できない“ハンディ”があったようである。しかし、息子の林喜八郎氏がのちに著した『生立の記 林毅陸手記』（私家出版、1954年）での本間喜一による回想文では「学長名義だけを貸しておくというようなことは、先生の御性格上、潔よしとなさらなかった」（121頁）との記述があり、林毅陸は愛大学長在任時も、変わらぬ情熱を傾注していたと思える。（いったん最高裁判所事務総長になっていた本間が愛大に復帰して第2代学長に就任した半年後の1950年12月、林は老齢による病のため79歳で死去）

- ⑥ **本間喜一 2・4代学長のエピソード** 実際に愛知大学生時代以来本間氏と親交の深かった越知専氏は、自著『本間イズムと愛知大学 実例編—その真髄を実話から学ぶ—』（愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2009年。同書のシリーズには同年刊の『資料編』や2012年刊の自費出版『実践編』がある）などで、本間氏の間性性を物語るエピソードを数多く披露している。本間氏（1987年没）自身も生前、文中の「七堂伽藍」などの話をよく語っていたことは各記事からうかがえる（例えば「15周年を迎えて 成長はこれからだ」、『愛知大学新聞』第133・134合併号、1961年11月15日付）。
- ⑦ **本間・小岩井両氏の親交** これについても越知氏の著書に詳しいほか、加藤勝美氏も『愛知大学を創った男たち—本間喜一、小岩井浄とその時代—』（愛知大学、2011年）で両氏の生涯を史料・文献・証言から客観的にたどってから、巻末を“状態”としての本間はそのような“過程”としての小岩井を包み込むような形で伴に愛大を創りあげていった。二人は伴に良く生きた人であった。敬愛と畏敬の念を捧げてこの書を終わりたい」（498頁）と結んでいる。ここでの「状態」「過程」の意味は同書を参照していただきたいが、両氏の「名コンビ」ぶりは関係者が口をそろえて語っているところである。

⑧ **「愛大事件」の際の本間学長** 愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『愛知大学東亜同文書院ブックレット別冊 愛知大学創成期の群像 写真集』（同センター、2007年）34頁では「愛知大学事件発生に際して、本間喜一学長が示した姿勢は、『学生は私にとって三親等以内のもの』との言が残っているように、学問と学生に対する誠実さにあふれるものであった」として関係者の証言を紹介している。この「証言」は、愛知大学事件を記憶する会編『抵抗—愛知大学事件 一九五二・五・七』（中部日本教育文化会、2004年）からの引用であるが、事件への本間の姿勢は『愛知大学五十年史 通史編』や越知・加藤両氏の著書のほか、和木康光『知を愛し人を育み 愛知大学物語』（中部経済新聞社、2012年）などでも活写されている。

⑨ **「白票事件」の際の本間氏** 教授の本間氏と学生の大石氏は同じ東京商大にいたことは注釈②でもふれたが、学位授与をめぐる「白票事件」自体は相当複雑な状況を呈した騒動であったようである。結局辞意を表明した各教授のうち本間らが通した一方で高瀬荘太郎は撤回、復帰したが、加藤勝美氏の著書では一章分、約30頁を割いてこの事件の経過が丹念に述べられていて、本間は知人への手紙の中で「騒動のなかで、安易な多数決を良しとせず、大学や最高裁でその体験を生かした」（121頁）と記していたとある。

⑩ **「愛大の建学の精神」** ここでの定義はむしろ大石氏個人の見解であるが、大学史として最初に編纂された『愛知大学 十年の歩み』（愛知大学十年史編纂委員会編、1956年）では「その発端において敗戦日本の現実に直面し、新国家再建への積極的な意欲と真理を探究しようとの高邁な精神があった」（2頁）と冒頭で述べられていて、“設備や財政の未整備を乗り越える意欲と向学心”は教職員・学生の間で共有されていたのは疑いなかろう。設立の理念は、創設時に作成された「愛知大学設立趣意書」で高らかに謳われていて、その後の歴代学長は『愛知大学通信』などでの挨拶で、ここでの文言を「建学の精神」と位置づけてきている。

⑪ **最初に設置された名古屋校舎** 2012年に名古屋駅近くの笹島地区に開校した「名古屋校舎」は、1988年までの初代(現車道校舎)、そのあと現在のみよし市につくられた2代目(閉鎖)に続く3代目にあたるが、「初代」もこのように、初期の段階で一度引っ越していた。最初の名古屋校舎にあたる「国鉄千種駅の近く」の「東邦高校の二階の一部」にしても、同高校自体が名東区に移転(その後大学も開設)したため面影は全くないが、千種駅西隣りの再開発ビル辺りであったと思われる。その後の“初代の移転先”が、現在は至学館大学としてやはり別の場所に移っている「中京女子短大の校舎」であったことは、いちおう愛大の公式年表にもよく記されているが、「戦時中ヴァイオリン工場であったことにはまた注目されよう。

⑫ **大高校地(グラウンド)** 愛知大学が知多郡大高町(現名古屋市緑区)に土地(7万2423㎡)を購入したのは比較的早く、名古屋(車道)で学部教養課程を開設して2年後の1957年のことであったが、翌々年には同地での環状道路敷設と緑地公園化の計画が策定されてしまった。愛大当局は1972年に、愛知県と名古屋市に計画変更と代替地斡旋を要求したがいずれも認められず、大高の土地は一部にグラウンドを1975年に開設するにとどまった。この座談会の時点では、三好の土地買収が実現して(1979年)造成が着工された(座談会の4か月前)ことから、大高問題はひとまず清算されたといえようが、大高グラウンドの閉鎖時期はいまだ不明な点が多い。おそらく三好のグラウンドが供用開始となった1983年春(座談会の1年半後)までには使用を終了したのであろう。

⑬ **「三好問題」** 名古屋(車道)校舎の郊外移転構想の背景には同校舎の狭隘さがあり、このような「名古屋問題」(学生からは「名古屋植民地論」として不満が噴出)は1974年、「放談会」による『名古屋白書』刊行によって正式な提起がなされた。その5年後の三好校地確保で、大高を含めた関連問題は「抜本的解決にむかう」と『愛知大学五十年史 通史編』164頁には記されているが、この座談会の時点では新たな「三好問題」として、

校地の具体的利用法など将来計画をめぐる討議が激しく交わされていた(経過は同『通史編』514～517頁に詳述)。三好校地を教学施設として利用することが決定(1983年4月28日法経学部教授会)してからも、各校地への学部配置などをめぐる議論は続くことになり、その度ごとに学生も当然反応を示した。三好のキャンパスが結局車道の法経学部1部の全在学生を移転させる形で1988年開校した24年後の2012年、同キャンパスは笹島新キャンパス開校による再移転で教学施設としての使命を終えたが、笹島進出を含めた一連の「問題」を「三好キャンパスの総括」として早期に回顧する必要は、確かにあるように思える。

(注釈文中の主観的な推測や判断等の記述は、すべて個個人の見解によるものです)

